

- 代 輪郭の奥行き - Shiro depth of edge

わたしの家は、個人が所有する空間の輪郭になる。ここからここまでは、わたしの空間であり、物であると。図書館は本を読みたい誰かのために、美術館や博物館もそれと同じように輪郭をつくる。

そんな私の輪郭や、誰かのための公の輪郭。そのほとんどが隔てる一本の線であるから、その輪郭に奥行きを、そこに、誰のためともない、「みんな」のための小さな空間をつくれるのではないかと考えた。

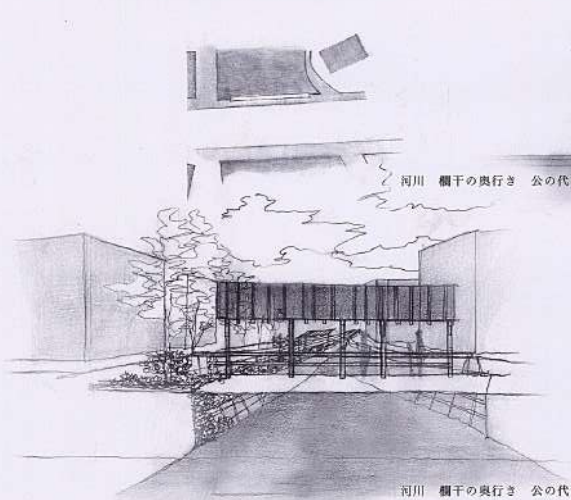
0. “代 <しろ>”

輪郭の奥行きは、領域の朝代のようなもので、狭まるのだから自身にはあまり旨味のない余裕や遊び。特定の意味をもたない「代」。

家の代 公共建築の代。
ある意味を持たない代は、「みんな」のための小さな公になる。

1. “屋代 解くやしろへい”

提案する一つの代は、屋根によって置いをつくる事で空間化された奥行き。多くの場合、「敷地・建物」の縁は「扉」や「門扉」であるから、単純明快に後退させた扉から下屋のような空間をつくった。屋代をなす扉で屋代解。

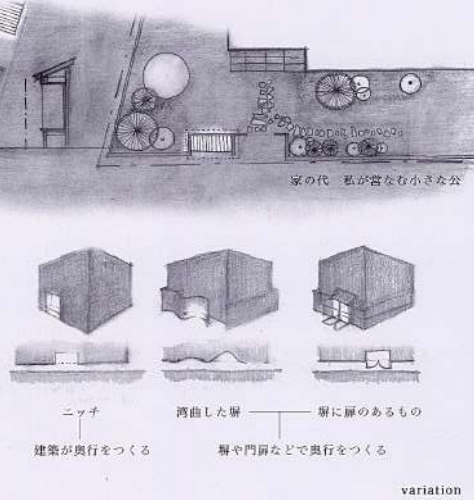


河川 欄干の奥行き 公の代

河川 欄干の奥行き 公の代

2. “variation”

屋代のみならず、代の空間としての姿は「みんな」によって多様で、ぐにやぐにやした扉によって生まれる奥行きや、外壁を産ませたニッチのようなものでも良い。可能性は様々である。

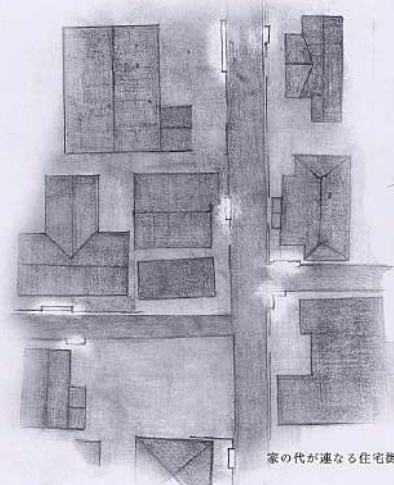


家の代 私が営む小さな公

variation

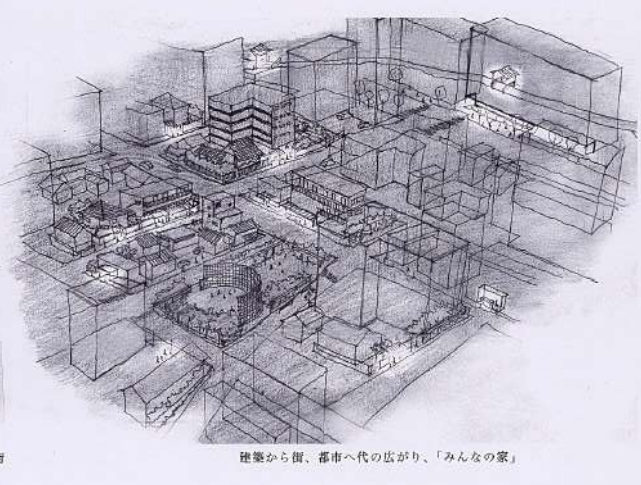
3. “代の連なり -みんなをつくる「みんなの家」-”

例えば、一つ一つの家の小さな代が連なり、界隈のような賑わいのある道がうまれる。



家の代が連なる住宅街

そして、各々がつくる建築の代は、連なり、やがて街から都市の縁へと奥行きをつくる。「みんな」がつくった小さな空間<みんなの家>は、都市に広がっていく。



建築から街、都市へ代の広がり、「みんなの家」

「みんなの家」って何だろう
極めて日常的な公の空間こそが「みんなの家」なのだと思う。
ある時、ある場所の公ではなく、何とことのない日常の中で、何でもない空間にある公に「みんなの家」にあるべき原初的な形があるのではないか。
公園や広場、図書館や劇場。誰かがある誰かのためではなく、みんなが誰のためともなくつくる小さな空間の連なりこそ「みんなの家」。「Home-for-all」になりうるように思う。



家の代が連なる住宅街